□特集・總持学園□

文化財を学ぶ

鶴見大学文学部文化財学科主任　大三輪　龍彦

人間が、その生活を豊かにし、便利に過ごすために考案し、造り出した器物が文化財です。ですから、文化財を研究することは、人間そのものと、人間の文化の歴史を研究することになります。鶴見大学は、曹洞宗大本山總持寺の創った大学で、人間の問題を深く追求し、正しい人間としての生きかたを求めるために開学されました。その目的を実現する一つとして、平成十年に文学部に文化財学科が開設されています。この学科は文化財という人類の遺産を通じて人間の歴史を解明し、あわせて人類共通の大切な遺産を後世に伝えることを目指しています。

この学科には、文献資料を中心に歴史の時間的推移を明らかにしようとする歴史・地理系列、考古遺物や美術資料をとうして歴史の空間的広がりの復元を試みる考古・美術系列、先人によっ

て私たちの手に伝えられた人類共通の歴史的文化遺産を次の世代に伝えるための研究と実績を行なう文化財系列の三分野がおかれています。

文化財は有形の物質ですから、実物を実際に手にしての研究を欠かすことができません。そこでこの学科では一年生から四年生までを通じて実習を必修で課しています。この実習に使う教材も、複製品や模造品ではなく実物に触れさせるようにしています。それは実物の持つ真実性を体感して覚えてもらうためにほかなりません。そのためにこの学科には多くの実物資料としての文化財が所蔵されています。

長崎の船大工町の町家の、水屋の戸棚の板戸は、四枚の板戸の裏にマリア像を描いた紙が貼られその後に信者の名前が墨書されています。イタリアの図書館にある史料から信者の人々は当時長崎に住んでいたセントドミニコ会ロザリオ組のキリシタンであることが判りました。この板戸は現在日本に残っている隠れキリシタンに関する第一級の史料となっています。また、マリア像を赤外線カメラで撮影してみるとその裏側に西国三十三カ所観音霊場の絵が描かれていることが判明しました。文化財の科学的研究です。

文化財学科は社会との連携も重視しています。昨年は臨済宗大本山建長寺の研究委託を受けて、境内の発掘調査を実施しました。その結果、建長五年（一二五三）の創建当時から現在に至る建長寺伽藍の変遷や、庭園の池の変化など興味深い事実が明らかになっています。その際、池の中から出土した漆器は現在知られる日本で最古と思われる組椀でした。この椀は火事で焼け

て、池に投げ込まれたものでしたが、幸い、元の形や大きさを復元することが可能であったので、本学科の手で、使われていた室町時代初期の姿を新たに再現しています。鎌倉市内出土の木器の保存処理も、鎌倉市教育委員会の委託を受けて実施しました。

今年やっと完成年度を迎える若い学科ですががんばっていきたいと思います。